

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年 8月20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 野生動物研究センター

職 名・学 年 特別研究員(PD)

氏 名 山 梨 裕 美

助成の種類	平成25年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成	
研究集会名	第33回 国際動物行動学会議	
発表題目	Cortisol analysis from hair of captive chimpanzees: methodological validation and application to social management	
開催場所	Sage Gateshead, Newcastle, UK	
渡航期間	平成25年 7月30日 ～ 平成25年 8月10日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円
	使用した助成金額	200,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	日本⇄イギリス 航空券代金: 164,750円
		国際動物行動学会参加登録料の一部: 35,250円*
(*)登録料は395ポンド、日本円にして約59,474円でした。		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 限られた予算しか持たない若手研究員にとって、このように助成していただけることはたいへんありがたかったです。どうもありがとうございました。	

成果の概要／山梨裕美

< 1 > 渡航概要

イギリス・ニューカッスルでおこなわれた、第33回国際動物行動学会に参加して、発表をおこなった。会議は8月4日～8日の5日間開催され、計783件の発表があった(口頭発表430件・ポスター発表353件)。Plenary Speakerとして、Iain Couzins氏(プリンストン大学)や、岡ノ谷一夫氏(東京大学)、Jane Hurst氏(リバプール大学)、Sharoni Shafir氏(ヘブライ大学)、Barbara Webb氏(エジンバラ大学)が招かれた。国際行動学会は、動物の行動をキーワードに多様な研究者が集まっており、幅広い対象種・手法でアプローチしている。この学会には毎回いくつかのテーマが定められている。今回は、Applied ethology and animal welfare、Animal learning and cognition、Behavioural ecology、Human ethology、Neuroethology、Primate cognition and behaviour、Robot models of animal behaviourの7つであった。申請者の専門である応用動物行動学と動物福祉も今回のテーマに含まれていた。そのため、関連する研究に携わる研究者も多く参加していた。自身の研究テーマに合致した会議であったため、多くの興味がひかれる研究に触れることができた。

< 2 > 得られた成果

申請者はこれまで、主に飼育下のチンパンジーを対象に動物福祉に関する研究をおこなってきた。現在はそうした研究の一環で、チンパンジーの長期的なストレスの評価をおこなっている。長期的なストレスは、行動の変容や、繁殖や身体的な健康、認知能力などに影響を与えることもあるため、その評価は、動物の福祉や行動を考えるうえで非常に重要である。今回の学会では、ポスターセッションで、Cortisol analysis from hair of captive chimpanzees: methodological validation and application to social management (チンパンジーにおける体毛中コルチゾルの測定：方法論の確立と社会管理への応用)というタイトルの発表をおこなった。この研究では、まずチンパンジーの長期的なストレス状態を動物の体毛に含まれるコルチゾルと呼ばれるホルモンを指標に、簡易に評価する方法論を開発した。また、そうしたコルチゾル濃度に影響を与える生理・環境要因を検討した。得られた結果として、まず体毛中コルチゾル濃度とチンパンジーの攻撃を受ける頻度と相関がみられた。さらに、体毛の色や採取した体部位などの生理要因の影響や、環境の影響が性別によって異なることなどがあきらかになった。これら結果より、体毛中コルチゾルの長期的なストレスの指標としての有用性が示され、分析手法の改良をおこなうことができた。今後は環境による差異の詳細を行動と合わせて検討していくことで、チンパンジーの社会管理への応用を考えている。今回のポスター発表は、体毛中コルチゾル測定が新しい手法であったことと、また得られた結果が動物の福祉や行動を考える上で重要であったことから、多くの研究者にポスターに訪れてもらえ、盛況に終わることができた。多様な研究バックグラウンドの研究者から、普段とは異なるコメントや質問を受けたことで、これまで考えたことのない方向性からの考察もできた。また、実験施設で個別飼育されていたチンパンジーの社会環境へのリハビリをおこなっている研究者など類似の興味を共有する研究者にも出会うことができた。こうした議論・出会いから、今後の研究の可能性が広がった。

さらに今回の学会参加で、多種多様な研究に触れることができた。招待講演者の発表は非常にレベルが高かったため、学ぶことも多く、研究を進める上でのヒントを得た。また、通常の口頭・ポスター発表を聞いたり、参加していた研究者と直接話すことを通して、近年の動物行動学の研究の動向を知ることができた。前回参加した2009年と比較して、研究テーマや手法に関する流行の変化をはっきりと感じた。このようなことを肌で感じられたことは、今後の研究の方向性を考えるうえで、非常に有意義であったと感じる。

以上、今回の渡航は収穫の多いものであったといえる。今回得たものを今後の研究に活かしていけるように日々精進したい。

< 3 > 謝 辞

今回の渡航を助成していただいたことで、貴重な経験を積むことができました。ここに篤く感謝申し上げます。